

視点 「言の葉」で酔わせていないか

文教科学委員会 専門員

やまぐち としふみ
山口 俊史

私のような教育政策をかじる浅学の必読書として、エレン・ケイの「児童の世紀」がよくあげられる。エレン・ケイによれば、20世紀は児童の世紀になるはずであったし、そうしなければならなかった。しかし、現実には戦争の世紀であり、また、飢餓にさらされる子どもがいたことも事実であった。さらには、科学技術の発展や競争社会の進展、家族のありようの変化の中で、子どもの心がそれらの変化に順応できない時代でもあった。児童にとって「受難の世紀」というべきであったのかもしれない。21世紀もその延長線上にあるという現実を見て、焦燥感を感じるのは、私一人ではなからう。

大人たちは、現実の社会を直視するとともに、子どもの視点に立って、できるだけのことをしなければいけない。しかし、その努力が万全とは言いがたいであろう。最近、大変気になることがある。政策や事業の名称は洒落ているが、中身に心がこもっていない感じがしてならないのである。一瞥しても、「ゆとり教育」、「待機児童ゼロ作戦」、「生きる力を確かなものにする学校教育」・・・枚挙に暇がない。

少々軽口をたたかせてもらいたい。

「ゆとり教育」？ 学歴社会、入試制度、競争の激化など、子どもをめぐる環境をそのままにして、単に学校教育で教える中身だけを安易に絞っても、子どもにゆとりができるものではなからう。今や、塾通いの子との学力格差や、我が国全体としての学力低下が懸念される羽目に陥っている。

「待機児童ゼロ作戦」？ 「作戦」という言葉には、積極果敢に攻撃的にことを進めるという、「攻め」のニュアンスがあり、行政の意気込みが強く伝わってくる。しかし、そもそも児童福祉法によれば、行政には、保育に欠ける子どもに対する保育義務が課されている。言ってみれば、待機児童など存在しない行政こそ法の予定しているところであろう。行政の怠慢が招いた結果への対応に過ぎない施策、法を守るための施策、いわば「守り」の施策ではないのか。

「生きる力を確かなものにする学校教育」？ 中教審の教育課程部会審議経過報告では、確かな学力を育成し、「生きる力」をはぐくむという考え方が大切であると強調している。「生きる力」ってそんなに簡単なものなのだろうかと考え込んでしまう。子どもをめぐる不幸な事件の多発を目の当たりにして、安易には使えない、使って欲しくない言葉であるという気がする。

それぞれの政策に難癖をつけているのではない。それなりに意義・目的のある施策であることは理解している。しかし、子どもをめぐる複雑な社会的背景、困難な教育環境の中で、何が本当に必要な施策なのか問われている時代である。名より実である。過度な期待を抱かせる、あるいは幻想を持たせるようなネーミングにエネルギーを使っている姿勢に対して警鐘を鳴らしたいだけである。